# 新約聖書の中の祈り　第14回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「使徒の働きにおける祈り」・・・・「使徒の働き」の中から、27の祈りの事例を見る。本日は、第18から第23の、6つの事例。

18. 使12：5　こうしてペテロは牢に閉じ込められたが、教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげていた。
    (1) 使徒ペテロが逮捕・投獄され、死の危険が迫っていた。教会の信者たちは集まって祈った。
    (2) 彼らの祈りは、父なる神に向けられた。
    (3) 祈りの内容・・・ペテロの命が助かるようにとの願い求めであった。
    (4) 祈りの結果・・・このあと、ペテロは、天使によって牢獄から救出された。

19. 使12：12　それが分かったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。
    (1) 使徒12：5の祈り会が行われていた場所が、ここで明らかとなる。マリヤという婦人の家であった。彼女の息子は「マルコと呼ばれているヨハネ」であった。マルコは、後年、「マルコの福音書」の記者となる。
    (2) 個人の家とはいえ、教会の信者たちが大勢集まることができた大きな家であったと推察される。

20. 使13：3　そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。
    (1) 経緯　13：1～2
        ① 1節　アンティオキアの教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟【学友】マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。　《注：マナエンはヘブル名マナヘムのギリシア語読み》
            - 【補足】預言者として挙げられているのは、バルナバ、シメオン。教師として挙げられているのは、ルキオとマナエン。サウロは預言者の部類に入るが、この時点ではまだ預言をしていなかったので、最後に名が記

されている。

- バルナバとサウロは、使徒でもある。

② 2節　彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が言われた。「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい。」

③ 3節　そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。

(2) 祈りの内容・・・バルナバとサウロを宣教旅行に派遣するにあたり、二人を主に捧げる祈り

(3) 【補足】断食を伴った祈り

① 宣教旅行には危険や苦難が伴う。

② 派遣される二人だけでなく、アンティオキアの教会の信者たちも、その期間中、日々彼らのために祈るとき、とりなしの祈りを通して共にその苦しみを受けることになる。

③ 断食は、自分の身を苦しめることである。

④ よって、派遣する前の祈りを、断食を伴った祈りとすることにより、宣教旅行における苦しみをあらためて実感する。それは、派遣される二人はもちろん、派遣する教会の信者たちも共に苦しみを受けることを覚えての祈りである。

(4) 祈りの結果・・・バルナバとサウロの上に手を置いて、二人を宣教師として任命してから、二人を送り出した。

21. 使 14：23　また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。

(1) 経緯　使 13：4～14：22

① バルナバとサウロの宣教旅行　13：4「セレウキア」（出港）→キプロス島、島内を巡回して「パポス」（出港）→13：13「パンフィリアのペルゲ」→13：14「ピシディアのアンティオキア」→13：51「イコニオン」→迫害を受けたため難を避けて　14：6「リカオニアの町であるリステラとデルベ」

② リステラでの出来事

- 足の不自由な人の癒し（14：8～18）
- パウロが石打ちにされる（14：19～20）

③ パウロは奇跡的な回復を経験する（14：19～20）

- パウロを石で打った群衆は、パウロが死んだものと思い、パウロの体を町の外に引きずり出して、立ち去った。
- 他方、リステラの町には何人かの信者がいた。彼らの中の一人は、テモテであった（使 16：1）。誰とは記録されていないが、リステラの町の信

者たちが、騒ぎを聞いて、倒れているパウロのもとに駆け付けた。

- 「弟子たちがパウロを囲んでいると」・・・彼らもまたパウロが死んだものと思い、どうしようかと動揺していた様子がうかがわれる。
- ここで、**奇跡的な回復**が起こる。パウロは立ち上がって、町に入って行った。町の中にはパウロを石打ちにした群衆、そしてそれを扇動した反対者たちがいたであろうに、である。
- このときパウロは、ふらふらと痛々しく町に戻ったのではない。奇跡的な回復をしたことは、「翌日、バルナバとともにデルベに向かった」という記述からも、うかがえる。
- 【補足】パウロは、この石打ちにされたことを、Ⅱコリ 11：25 で回想している、「石で打たれたことが一度」
  - Ⅱコリ 11:23～27 には、パウロが受けた様々な苦難が記されている。石打ちは 1 度であったが、ユダヤ人の鞭で打たれたのが 5 度、ローマ人の鞭で打たれたのが 3 度にのぼる。
  - パウロの体には傷跡がまざまざと残っていたはずである。それをパウロは、ガラ 6：17 では「私は、この身にイエスの焼き印を帯びている」と言っている。
- *14：20*　リステラで石打ちにされたその翌日、奇跡的に回復したパウロは、バルナバと共にデルベへ向かった。

④ 14：21　デルベで福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子とした。その後、来た道を引き返し→　リステラ→　イコニオン→　ピシディアのアンティオキア

⑤ 14：22　引き返す途中、それぞれの町で、弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。

⑥ *14：23*　また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、<u>断食して祈った</u>後、彼らをその信じている主にゆだねた。

(2) 祈りの内容・・・それぞれの町の地域教会に長老たちを任命するにあたっての祈り。長老たちを主に捧げる祈りである。

(3) 断食を伴った祈り

① 「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」

- ここでいう「神の国」は、聖書の中に５つある神の国の層のうち、メシアの王国を指す。
- 信者はメシアの王国に入るまでに、それぞれが受けるべき苦しみを経なければならない。これは、信者に課せられる神のプログラムである。
- 地域教会の使命は２つ。一つは福音宣教、そしてもう一つは、それぞれの苦しみを受けていく信者たちの励ましと霊的成長である。

② 地域教会の使命遂行におけるリーダーは、各教会の長老たちである。福音宣教にせよ、信者の霊的成長にせよ、リーダーたる長老たちには苦しみが伴う。また、周囲からの迫害があるときには、長老たちはその矢面に立たねばならない。

③ 断食を伴った祈りとは、このような苦しみを覚えての祈りである。

(4) 地域教会における長老たちの選任について

① ここで言う「長老たち」とは、その群れのリーダーとなる者たちである。みことばを教え、信者の霊的状態を監督していく役割を担う（Ⅰテモ5：17、Ⅰテサ5：12、Ⅰペテ5：1～4）。現代の教会で言えば、牧師である。

② 「教会ごとに長老たち」とあるように、ひとつの地域教会に必ず複数の長老が立てられた。

③ 長老たちは、パウロとバルナバが選んだ。信者たちの会合で選ばれたのではない。そして、ここでは、パウロとバルナバは断食を伴った祈りをした。

④ 選任にあたり、パウロとバルナバは新たな長老たちをどのようにしたかと言うと、23節「彼らをその信じている主にゆだねた」とある。

- 「ゆだねた」と訳されているギリシア語は、銀行に預金する、あるいは信頼して託する・預ける、という意味である。
- 信者は、イエスを信じ、イエスを信頼する者である。長老たちは、そのような信者の有り様にとどまらず、選任されたときに彼ら自身が、イエスに預託された者でとなる。
- これは、長老たちがイエスの守りの中にあるということを示す。彼らの責任は重く、その苦しみも大きい。しかし実は、彼らは、主イエスの守りの中に預けられた者たちであって、イエスにあって守られている。

22. 使 *16：13、16*　（13節）そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。・・・（16節）さて、祈り場に行く途中のことであった。私たちは占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。

(1) 経緯

① 15：1～21　エルサレム会議、テーマは『異邦人信者に割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきかどうか』

- 結論は、その必要なし
- 付帯条件は、20節「偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように」（下線部の関連箇所　創9：4）

② 15：22～35　会議の結論を伝えるために、ユダとシラスが派遣された。

③ 15：36～16：1　「先の宣教旅行で主のことばを宣べ伝えた町々で、兄弟たち

（信者たち）がどうしているか、また行って見て来よう」ということになる。パウロはシラスと、バルナバはマルコと、それぞれペアを組んで、二手に分かれた。バルナバはキプロス島に渡り、パウロはデルベそしてリステラに行った。

④ 16：1～4　パウロはリステラで、テモテという弟子を一行に加えた。彼らは町々を巡り、「エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を、守るべきものとして人々に伝えた」（16：4）・・・「規定」とは使 15：28～29

⑤ 16：5～12　それからの行程では、行こうとした先を「聖霊」が禁じる、またその次には、「イエスの御霊」が許さない、ということが起きた。そしてパウロが幻を見せられ、マケドニアに渡ることになった。一行は、マケドニアの主要な町のひとつ、ピリピに数日滞在した。

⑥ その滞在期間中の安息日、一行は在住のユダヤ人たちが集まる場所をさがして、町の外の川岸に行った。当時、町の中にユダヤ人の会堂がない場合、在住のユダヤ人たちは、町の外の川岸などに集まることが通例であった。

(2) 13節は、祈りの場所について記している。

① 「祈り場」・・・これは、在住のユダヤ人たちが祈るために集まる場所。まだ町の中に会堂を持たない場合、安息日の集会や平日の祈りの時間を守るために集まって祈る場所である。町の外、水際の場所が選ばれることが多かった。

② 13節　パウロたち一行がピリピに到着し、安息日を迎えた。ピリピの町の中にはユダヤ人の会堂はない。ピリピの町の近くを川が流れていたので、パウロたち一行は、川岸のどこかにユダヤ人たちが集まってくるだろうと推測し、行ってみた。

(3) 16節　この「祈り場」も、13節の祈り場と同じ場所である。当時、ユダヤ人たちは、安息日でない平日も、日に 3 回設けられていた祈りの時間を守るために、祈り場に集まっていた。

(4) 「祈り場」における祈りの内容：会堂や祈り場でのユダヤ人たちの祈りは、あらかじめ書かれた文を読む、あるいはそれを暗唱して祈る祈りであった。

23. 使 16：25　真夜中ごろ、パウロとシラスは祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。

(1) 経緯　使 16：16～24

① *16～18節　パウロが、女奴隷を占いの霊（悪霊）から解放した*

② 19～24節　女奴隷の主人たちが訴えて、パウロとシラスは逮捕された。二人は鞭で打たれ、牢に入れられた。

③ 25節　二人は、牢の中で、真夜中ごろ、祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。ほかの囚人たちはそれに聞き入っていた。

(2) 祈りの特徴

① 祈りの時刻は、真夜中ごろ

② この祈りには、賛美歌を歌うことが伴っていた

③ 祈りの内容は、記述されていないが、おそらく獄中にある自分たちの今の状況について、であろう。しかし、同時に、神に信頼し、神を賛美する歌を歌ったのである。

(3) 祈りの結果　使 16：25～40

① 26～28節　すると突然、大きな地震が起こり、牢獄の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部開いて、すべての囚人の鎖が外れてしまった。・・・激しく建物が揺れ動いて、建物の外に通じる扉も、囚人を収監しておく各部屋の扉もすべて、開いてしまった。そして、囚人をつないでいた鎖の根元は建物の壁に埋め込まれていたものが、すべて外れて、囚人たちは自由に動けるようになった。しかし、誰一人として逃げ出さなかった。おそらく、パウロとシラスが静かにしていて動かなかったことに影響されたのであろう。しかし、看守は、扉が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い、自分の剣を抜いて自殺しようとした。当時のローマ法のもと、囚人に逃げられた看守は死刑である。この看守は処刑されるより、自決の道を選ぼうとした。看守が自決しようとしているのを見て、とっさにパウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」

② 29～34節　看守とその家の者全員の救いと洗礼

③ 35～40節　夜が明けて、長官から釈放命令。しかし、パウロは長官の昨日の措置はローマ法違反であることを指摘し、長官自ら出向いて自分たちを牢から出すこと（パウロたちへの措置が間違っていたことを公けに示すことになる）を要求した。長官はこれを聞いて恐れ、パウロの要求を受け入れた。釈放された二人は、直ちに町を出たのではなく、リディア（使 16：14～15）の家に行き、ピリピの町の住民で信者となっていた人々に会って、彼らを励ましてから旅立った。

④ 【補足】使 16：12「私たちはこの町に数日滞在した」・・・「私たち」とは、パウロとシラスの一行の中に、この「使徒の働き」の著者であるルカも含まれていたことを示す。使 16：40 の「立ち去った」、ピリピの町から旅立った一行を指す代名詞は、原文では「私たち」ではなく、「彼らは」となっている。ルカは、スタートしたばかりのピリピの地域教会の指導のために、一行から離れてピリピに留まったものと推測される。その後、再びルカがパウロと行動を共にするようになるのは、使 20：4～6、トロアスにおいてであった。

【補足】マルコについて

1. マルコは、後年、マルコの福音書の記者となる弟子。
2. マルコは、イエスの公生涯において、若年ながら弟子集団の中にいた。ゲツセマネの園でイエスが逮捕されたときも、近くにいたようである。自分も逮捕されそうになって、あわてて逃げた（マルコ 14：51～52）
3. マルコは、パウロとバルナバの伝道旅行に同行したが、旅行の途中で帰ってしまった（使 12：25、13：13）
4. パウロは 2 回目の伝道旅行ではマルコを外すことを主張。バルナバはこれに反対し、結果的にパウロとバルナバは別行動となった。パウロはシラスと、バルナバはマルコとペアを組んで、第 2 回伝道旅行は二手に分かれた（使 15：36～41）
5. マルコはその後、ペテロのもとで訓練を受けた（Ⅰペテロ 5：13）。ペテロにとっても、マルコは大きな助けになったようである。ペテロのもとで霊的に成長したマルコは、パウロからも頼りにされるまでになった（Ⅱテモ 4：11）
6. マルコによる福音書は、福音書の中で最も早く書かれた。その中にはペテロしか知らないような出来事も書かれており（マルコ 1：30～31、14：66～72）、マルコがペテロから直接聞いたことがうかがわれる。